

「迷い悩み、考えた日々が与えてくれた力

中京大学 総合政策学部 総合政策学科4年
金澤 つき美さん

クラシックのフルート奏者を目指し、音楽科高校で学生生活を送った金澤さん。同級生が音楽系大学に進学する中、自身は社会の基本的なことを学べたらと、中京大学で総合政策を専攻します。しかし、音楽とは全く異なる世界での学生生活に馴染めず、もやもやとした時期を過ごしました。もう、大学を辞めよう。相談を兼ね留学中の友人を訪ねた米国旅行で、人生を変えるような刺激を受けます。「英語が話せたらもっとできることが増えるかも」。同じ頃、大学の行政学ゼミで学びの楽しさを感じ始め、留学も志望するようになります。

とはいえ現実には厳しく、伸び悩むTOEFLの点数。結局、大学を介さず自力での留学を決意し、3年次に休学して米国ワシントン州のコミュニカレッジ*1に留学しました。

日々「追われるように」勉強し、1年間で学部の現代社会学を受講できるまでに成長。充実した留学生活を終え、帰国後は「シングルマザーの就労問題」をテーマに卒論を書

グローバルに活躍するには？

物事を考え、発信する力。適応力。

*1 米国で地域に開かれた公立の二年制大学。

*2 1934年より続く国際学生交流団体で、日米両国の学生が夏の1か月間の共同生活を通して様々な世界的問題に関する議論を行う。Web <http://kjass.net/jasc-japan/>

き上げました。公務員試験の受験を考えていた時、「挑戦してみたら」と教授から手渡されたのが「日米学生会議*2」のパンフレット。徐々に「自分をアピールできるこの会議に人生をかけてみたい」と気持ちに変化し、合格率10倍の難関を乗り越え、メンバーに選出されました。

会議では、分科会「21世紀の都市のあり方と個人の生き方」に所属。日米の学生が10人単位でオンラインミーティング、合宿や研修を重ね、本会議で意見をぶつけ合います。「尊敬できる仲間と切磋琢磨し、共に勉強できる時間を持てたことは幸せ」と金澤さん。翌年は運営実行委員に選出され、後輩たちを見守り導く立場へと成長しました。

「留学と大学での学びで世界の見方が変わり、「なぜ」と突き詰めて物事を考えるようになりました」。卒業後は大学院へ進学して国際関係論を学びたい。

そして、もう一度海外へ渡り、博士課程まで進みたい。フルートを奏でていたあの頃には全く予想できなかった金澤さんの姿がそこにありました。



▲第69回日米学生会議のメンバーとともに（後列右が金澤さん）

一人でも多く、母子の命を救いたくて

名古屋第二赤十字病院 助産師
佐藤 友香理さん

が暗く、笑顔がないのが印象的でした。配給は米、豆、油のみで栄養状況も劣悪。NGOが感染予防に配布した石鹸すら売って野菜を買う暮らし……。当然、妊婦検診の概念はなく、資格のない伝統的産婆が自宅出産を手伝う現状。ただその日を生きることに必死な彼女たちに、少しでも安心してほしいと、文化や宗教を重んじながら母子保健の大切さを訴え、懸命に声かけしました。また避難民や現地スタッフ、ボランティアとの触れ合いを通じ、「これまで狭い世界にいた自分」についても改めて気づかされたと言います。

「女性の誕生から墓場まで」全てのケアができる助産師の仕事。「助産師だったからこそ、国際医療救援に関われた。一人でも多くの赤ちゃんが健康に生まれてくるよう、世界中の母子に関わることを、それが自分の役割だと思えます」と佐藤さんは今後の夢を語りました。



▲現地の助産師とともに診察する佐藤さん（写真左）



今年7月下旬、バングラデシュ南部避難民が訪れるクリニックで、佐藤さんは助産師として母子保健活動に5週間従事しました。

「生命の誕生に感動して」助産師となり、仕事と子育てを両立してきた佐藤さん。転職は平成24年、夫の転勤でインドのバンガロールに3年間滞在したことでした。貧困や病で命を落としていく子どもたちを目の当たりにして衝撃を受けます。帰国後は国際助産師として働きたいと、国内外の国際医療救援活動を積極的に行い、佐藤さんの最初の就職先でもあった名古屋第二赤十字病院に再就職。産科の仕事の傍ら英語学習に励み、研修を受けるなど3年程の準備期間を経て、国際救援に携わる資格を得ました。

初の派遣先となったバングラデシュ南部。マンマー国境の土地を切り崩したキャンプ地に竹とビニールで家を建て、約90万人の避難民が暮らします。湿気が多く、下痢やマラリア、コレラなど感染症も懸念される不衛生な状況。「イスラム文化圏の女性は、医療施設を受診する際、男性の許可が必要。見通しの立たない避難生活で、妊婦さんの表情

グローバルに活躍するには？

言葉は一つの手段。それよりも、「やりたい」という思いが大事。そのうえで、「自分はこれができる」というスキルがあること。



「自分じゃないと実現しない」ことを求めて

一般社団法人グローバル愛知 事務局長
エリオット コンティさん

日本との出会い

米国オハイオ州出身のエリオットさんは、大学で歴史学を専攻。日本語を2年間学び、交換留学生として来日するも、わずか2か月で東日本大震災が発生、帰国を余儀なくされます。母国で大学を卒業したものの、すでに日本文化に魅了されていたエリオットさんは、平成24年、英会話講師として再び名古屋の地を踏みしました。

講師の仕事しながら文部科学省の奨学金試験に合格。研究生として1年間学び、見事大阪市立大学大学院に入学。「貧困地域に住む外国人の生活」をテーマに修士論文を書き上げます。修士課程修了後は母国で博士課程に挑戦しよう、そう思っていた矢先、転職が訪れました。

“ご縁”と“必然”に導かれて

旧知のナガサキ工業株式会社(緑区)の社長から、「日本で働きたい外国人や、人材不足に悩む中小企業の支援をしたいから一緒にやらないか」と誘いを受けたのです。自分じゃないと実現しないと感じたエリオット



▲名古屋大学で講演するエリオットさん

さんは、帰国をやめ、日本での挑戦を決意。そして平成29年に自らが事務局長となり立ち上げたのが、(一社)グローバル愛知です。

同団体では、留学生向けに企業紹介・交流事業・日本語教育やガイダンス等の就職支援を実施。また企業向けには、セミナー・会社見学・大学と連携で合同企業説明会を行い、両者のマッチングにつなげています。「留学生の7割が日本での就職を希望。潜在的戦力に溢れているのに、実際には3割程度しか就職できていない。中小企業は人手不足で優秀な人材を求めているはずな

のに、留学生には目も向けられない現状がある」と言います。

問われる、「受け入れ側」の意識改革

この問題解決のためには、外国人人材を受け入れる側の意識改革が必要です。「グローバル時代以前の考え方を変えること。日本の“特殊な”企業文化をきちんと説明できるノウハウが受け入れ側に問われる」とエリオットさん。「外国人社員に“日本文化だから”“就業規則に書いてあるから”は通用しない。その根底のロジックを説明できなくては」とエリオットさん。「外国人という理由だけで受け入れのハードルを上げないで。言語サポート、丁寧な説明、宗教の配慮を必要とする以外は同じ人間。日本人と大きく変わりません。社員の一人として、その人が企業、ひいては社会にどう貢献できるかを見失わないこと。外国人の強みは日本語ではありません。外国語、日本人とは違った発想、さらに留学生なら大学で学んだ専門的な知識。これらのプラス面を目を向け適所に配置する。それが企業の成長へとつながると思います」。

外から日本を見してみる

「日本人がグローバルに活躍するためには、まず海外に行くこと。日本の基準で世界を見るのではなく、外から日本を見ることで自分を相対化し、自分なりの世界観を持つ。その時初めて、自分が本当にグローバルに活躍したいのか問う必要が出てくるのです」とエリオットさん。「日本人は勤勉で粘り強く、我慢強い。目標さえ決まればそれに向かって頑張れるはず」と微笑みます。

今後は、「数字にとらわれず、質の良いマッチングを目指したい」と事業の目標を語るエリオットさんの将来の夢は、なんと「さらにグローバルに活躍すること」。「僕にとって大事なものは、自由に、グローバルに働くこと。自己実現でき、付加価値を生み、指導して下さった方々と社会に貢献できる道を歩みたい。そして、僕の人生観を豊かにしてくれた日本と母国とをより深くつなぐ架け橋のような役割を何らかの形で果たせれば」と語ってくれました。

グローバルに活躍するには？

探究心と、学びに対する謙虚な姿勢。多様性を重視して、答えが一つではないことを軸に生活してみれば。



グローバルに活躍されている5人のストーリー、いかがでしたか。5人は、決して華々しい道程をたどってきたわけではありません。共通するのは、迷い、時には挫折しながらも、強い「意志」を持って常に「夢」と「学び」を追いかけたこと。そして彼らのその「意志」を後押ししたのは、学校生活や社会生活の場で得てきた「知識」や「スキル」だったのではないのでしょうか。

今や、誰もが国を越えて活躍でき、自らが選びさえすれば、チャンスを得られるグローバル社会となりました。世界における日本、日本における自分、そして世界における自分とは…そんなことを想像し、自分のできること、やりたいことを考えてみるのも面白いかもしれません。